平成 27 年度「特別支援教育に関する実践研究充実事業
（特別支援教育に関する教育課程の編成等についての実践研究）」報告書

団体名	学校法人　カナン学園
研究開始年度	平成　27年度

Ⅰ　概要

１　指定校の一覧

設置者	学校種	障害種	学校名（ふりがなを付すこと）
私立	特別支援学校	知的障害	三愛学舎（さんあいがくしゃ）

２　研究テーマ

知的障害を併せ持つ発達障害等の教育的ニーズに応じた学習内容・方法を探り、キャリア教育の視点から教育課程の編成にもりこむ。

３　研究の概要

（研究内容）

知的障害を併せ持つ発達障害生徒が、積極的に社会参画していくためには、キャリア教育の視点を授業に生かし、仲間との対話を通して自己理解を深め、他者理解をする中で自己肯定感を高めることが重要である。

具体的には以下の４点である。

①キャリア教育は、一人一人の生涯にわたっての発達支援であり、社会の中で自主的・主体的に生活しながら自己を高めていくことにある。キャリア教育の視点から「対話による相互作用」（注釈：仲間との話し合いを通して自己の思考を深め、拡大すると共に他者への理解を深める）を取り入れた。

②軽度の知的障害、知的障害を併せ持つ発達障害、身体障害を併せ持つ生徒等6名で小グループを構成し、本研究のテーマである知的障害を併せ持つ発達障害生徒A男に焦点をあて、自己肯定感を促すための授業内容・方法を考察した。

③学習時間は、教育課程の「作業」学習の時間（週に一コマ(90分)）を利用して年間22回、「ゼミ」（注釈：演習）形式の授業を行った。

④学習内容は、テーマに応じた対話形式の学習、自己理解を高めるためのチェックリスト記入、ドキュメンタリー映像の鑑賞で登場人物の評価など、「他者理解」（注釈：相手を理解すること）、「自己理解」そして自己肯定感の高まりをねらいとした。

（評価の観点）

a. 知的障害を併せ持つ発達障害生徒A男の自己理解、他者理解がどの程度できたか。

b. キャリア教育の視点からゼミ参加者の社会生活への移行の兆しがどの場面で出てきたか。

４　研究の成果

a. 知的障害を併せ持つ発達障害青年A男の「自己理解」と「他者理解」について

A男は、他人の気持ちや場の雰囲気を理解することが苦手である。A男の教育的ニーズは、自己理解を深め、仲間をも理解することである。

「自己発見テスト・エゴグラム」(1970,池見、杉田)の自己評価の結果、A男は「合理的」「理知的」「情報の分析力」の面で優れているという評価に満足していた。その反面「冷淡」「人情味がない」「自己中心的」等に対しては「確かに…」と冷静に構えていた。

「他者理解」については、「対話による相互作用」の中で仲間を評価する言葉が出ることや、ドキュメンタリー番組のＶＴＲで「引きこもり」の場面に登場する青年を見て、「自分でも分かる」と、引きこもりの青年に理解を示す発言もあった。

また、「ゆるし傾向性尺度」(2007,石川、濱口)のアンケートで「イヤなことをした相手にも、親切にしようと思いますか？」の質問に対して「どちらかといえばいいえ」と答えていたのが対話の学習後に同質問に対して「どちらかといえばはい」に変わり、「イヤな相手と仲良くする」「イヤな相手とも関係を良くなる方法を考える」等々について、今までは嫌なことをする人に対して嫌悪感をもっていたのが、少しずつ許せるようになってきた。

b.キャリア教育の視点から生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組について

キャリア教育の意義については学習しなかったが、「自己理解」「他者理解」が進むことにより、積極的に授業に臨むことができた。そして社会参加への意欲につながった。

A男を含むゼミの3人が、自分の学習課題を整理し、三重県で行われた専攻科研究集会の分科会(障害をもつ当事者発表）で発表することができた。

５　課題と今後の方策

(課題)

「対話による相互作用」は、自由に話し合ったり意見を出し合ったり中で様々な人の考えを理解し、自分の考えをまとめ、広げていくことができる。したがって、お互いが対面して話し合えるように座席に工夫をこらす必要がある。

自己理解・他者理解を通して自己肯定感が高まるように、一人一人の発言を肯定的に受け止めるように配慮し、積極的・主体的な態度が、自立や社会参画に向けて必要な資質・能力の基盤作りになるというキャリア教育の視点をもつ。

(今後の方策)

対話による授業は導入部が大切である。したがって、課題の選択や意図を明確にし、課題に対する「意味づけ」をすること、そして、一つの課題が終わったら振り返りを行い「価値付け」をすることが大切である。

知的障害を併せ持つ発達障害等の生徒が積極的に授業に参加するためには、できるだけ小集団の方が望ましく、しかも知的能力が同程度か、会話が通じ合える仲間同士が有効である。（障害の重い軽いに関係なく、認識力が同程度の仲間の小集団が望ましい。）

授業時間は、一コマを90分で行ってきたが長すぎた感もある。支援学校では一コマ60分が適当な時間である。

教師の役割は、知識の伝達に力点を置くのではなく、相互に対話が成り立つようにコーディネーター役を担うことである。